

＜小中一貫教育の成果と課題（生駒北小中学校）＞

※成果

- 1、中学校の定期試験前一週間を、トライ・ウィーク（小学生が家庭での自主学習に力を入れる期間）とし、家庭学習の充実を促した。実施については、「てびき」書を作成して、学年毎の適切な学習時間や内容を保護者や児童に示したが、これが保護者・児童の学習への意識を高めた。
- 2、児童の「規則や決まりを守ろうとする気持ち」を高めることができた。昨年度末はアンケート「決まりや規則の遵守」が「できた」が 53.3%だったが、本年度は 76.1% になり、きまりや規則に厳しい中学生の姿を見て学んだものと思われる。
- 3、学校生活についての満足度だが、「小中一貫教育を実施したこの 1 年間の学校行事は充実していた」と考える児童が 79.4%で、昨年度末の 70.0%を上回っている。保護者においても 89.4%がそのように考えている。

（以上小学校児童アンケート・保護者アンケート・教職員自己評価より）

- 4、小中合同の行事（始業式、終業式、入学式、運動会、文化発表会、避難訓練等）の運営形態を協議し、実施することができた。

学校行事を合同で実施することで、子どもが幅広い人間関係を作ることができたと思われる。中学生が小学生に優しく声をかける姿、下級生から格好良く見られたいという中学生の自尊心の醸成が感じられる。

- 5、生徒指導上の問題を解決するため、お互いが情報提供・情報共有することは増えた。職員室では校種に関わらず、教職員の話聞き合い、親身になって解決策を考える気運が生まれている。
- 6、小中学校 9 年間の教育課程を統一した形式で整えたため、教科毎の教育が見通しやすくなった。特に乗り入れ授業を行っている算数・数学、音楽、図工・美術、体育などの指導において、系統性を教員が意識することにつながった。
- 7、学校行事での小中交流は、子ども同士が自分の成長に気づき、また未来の自分を思い描く場になった。
- 8、小中で授業観察をし、合同研修会を開いた。生活に密着した学習内容で一人一人の子どもの成長を追う小学校、専門的な分野まで踏み込んだ学習内容で子どもに自立を求める中学校、これら小学校と中学校の子どもの違いと教員の指導の違いを理解し合うことができた。
- 9、リーダーとして活躍していた 6 年生は、中学生になったとたん初心者立場（ビギナー）になる。6 年生時、担任の指導がなかなか浸透せず、生活態度など改善しなかった子どもが、中学の部活動で、上級生から学んだ目上の人に対する言葉遣いや規律正しさを身につけていく様子を見、リーダーとビギナーを繰り返す体験が、人間形成や社会性を身につける上で必要なことを目の当たりにした。
- 10、小学校 5・6 年生で授業の一単位時間を 50 分とすることは、中学校への円滑な接続につながり、中学校は昼休みの時間に「学びタイム」（10 分間）を設け、基礎学力の補充をすることで、学力の向上が期待できるのではないかと考える。

※課題

- 1、チャイムを小中学校で統一したため、中間休みが取れなくなった。外遊びの減少や体力の低下を懸念する。
- 2、中学校と小学校では、指導の内容や方法、重点が少し違う。教職員の意思疎通を図る組織マネジメントを専属で行う人材（今のコーディネーター体制では不十分）が必要である。
- 3、異学年集団との多様な学習活動を行う必要がある。
- 4、市教委から提示された生駒北小中一貫教育のイメージを常に念頭において教育課程を編成した。ICT教育、小中教員の協同による指導等でイメージどおりの学校運営ができてきたと考えるが、基礎学力の向上が今後の課題である。
- 5、学校と保護者だけでなく、地域も交えて智恵を出し合い、魅力ある学校づくりに努めると共に、地域の活性化につながる役割も果たしていく必要がある。
- 6、校務分掌各業務に関しては、そのすべてを統合することは業務内容上機能的ではなく、基本的に小中別で行ったが、今後校務分掌の再編が必要だと考える。
- 7、運動会など合同行事を実施するにあたり、小中間の活動の違いや役割分担の調整する必要がある。